



TITLE:

日本語の三つのタイプの「～は～が」構文とそのインドネシア語に対応する構文との関係について( Abstract\_要旨 )

AUTHOR(S):

Tiwuk, Ikhtiari

---

CITATION:

Tiwuk, Ikhtiari. 日本語の三つのタイプの「～は～が」構文とそのインドネシア語に対応する構文との関係について. 京都大学, 2017, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2017-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20457>

RIGHT:

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	Tiwuk Ikhtiari
論文題目	日本語の三つのタイプの「～は～が」構文とそのインドネシア語に対応する構文との関係について		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、日本語の三つのタイプの「～は～が」構文がインドネシア語のどのような文と対応するかを考察し、両言語における特徴および相違点の究明により両言語についての理解を深めることを目指した対照言語学的実証研究である。</p> <p>第1章では、まず研究のテーマと関連する主題と主語の区別に関して、先行研究に従い、主題マーカとしての「は」は文中における動詞との関係を有する必要がない一方、主語マーカとしての「が」は文中の述語と関係を持つという本論文における基本的な考え方を提示している。</p> <p>さらに、従来「は」「が」に関する研究テーマがあまりにも多岐に亘っているために、本論文では「象は鼻が長い」のような「～は～が」が併存する構文に絞り、「は」「が」を別々ではなく併せて考察すること、また、その中でも①「掃除は私がした」、②「象は鼻が長い」、③「野球はあの学校が強い」というNP<sub>1</sub>とNP<sub>2</sub>の間の関係が大きく異なる三つのタイプの構文を選択することが述べられている。これら3種類の構文が選ばれた理由として、①においては「ヲ」格項の主題化が生起すること、②においては「象」、「鼻」というNP<sub>1</sub>、NP<sub>2</sub>間に所有関係が存在すること、③においては「野球」、「学校」というNP<sub>1</sub>、NP<sub>2</sub>間に〈部分—全体〉の関係が存在することが挙げられている。</p> <p>第2章では、第1章で取り上げられた3種類の「～は～が」構文の中で①の「ヲ」格項の主題化構文と、インドネシア語における目的語としての動作対象が主語となる「di-動詞」及び「Ø-動詞」構文（patient voice構文）との対応関係について考察が加えられている。</p> <p>この章ではまず、インドネシアの日本語学習者に日本語の受動文の多用と誤用が多いのは、インドネシア語では目的語を主語にした「di-動詞」及び「Ø-動詞」構文が母語干渉によって、日本語の「（ら）れる」による受動形に置き換えられる現象がよく見られるが、日本語の受動文をインドネシア語の上記構文に置き換えることはできても、その逆は必ずしも成り立たないことが指摘されている。</p> <p>さらに、「米は年に三回作る」のような「は」による主題が後続の伝達内容に関する「モノーあり様・在り方」の《説明》及び「レポートは郵送で提出してもよい」のような主題と後続の要素の関係が「処置課題—処置内容」という《処置》を表す2種類の構</p>			

文がそれぞれ「Padi di-tanam tiga kali dalam se-tahun」と「Laporan boleh di-kirim lewat pos」のようなインドネシア語の構文と対応関係を示し、インドネシア語では、助詞「は」のような対照機能を持つ文法的手段が存在せず、日本語の名詞句が不定名詞の場合、インドネシア語にそのまま訳すと不自然な文になるため、名詞を特定化する手段を講じる必要があるという両言語における相違点も指摘している。

第3章では、第1章の②のタイプ「象は鼻が長い」構文とそれに対応するインドネシア語の構文が扱われ、その考察を通じて、日本語同様インドネシア語においても所有者を主題化する文（有題文）があることが指摘されている。本章では、尾上(1998)による、典型タイプ(F)「象は鼻が長い」を含むDからHまで5タイプ、(D)「この壺は色が青い」、(E)「この子は目がかわいい」、(G)「いわしは頭がうまい」、(H)「焼き魚はさわらがうまい」の構文には、すべてのタイプと部分的な共通点を示す(F)タイプの他、X-[YZ]という構造におけるN1とZが主従関係にある(D)、(E)タイプ、述部Zを言わなくても意味が理解される(G)、(H)タイプがあり、「N1はN2が述部」のN1と述部が「措定的」主従関係にないタイプ(H)を除いて、すべて(F)「Gajah belalai-nya panjang」、(D)「Bejana ini warna-nya biru」、(E)「Anak itu mata-nya besar」、(G)「Ikan sarden kepala-nya enak」のようにインドネシア語との対応関係を示し、インドネシア語ではN1とN2の間の照応リンクとして機能する接尾辞-nyaを付加する必要があることが指摘されている。

第4章では、第1章の③のタイプ「野球はあの学校が強い」（本章では「カキは広島が美味しい」）構文とそれに対応するインドネシア語の構文が扱われている。

上記構文は、X-[YZ]という構造におけるN1とZ 及びN1と[N2Z]が主従関係にないという点において、第3章で扱った「象は鼻が長い」構文を含む(D)～(G)までのタイプと意味構造が異なっていることがその特徴であり、「カキは広島が美味しい」構文はインドネシア語の「Kalau tiram Hiroshima yang enak」構文に対応することが指摘されている。

さらに、「広島が美味しい」という「AがBだ」の部分とインドネシア語の「分裂文」との対応関係を考察し、焦点がAに当たる場合、日本語とインドネシア語の間には、「日：これが最後だからねーイ：INI(-LAH)（述部） / Ø yang terakhir（主部）」と「日：最後に出てきたのが、大きな熊だったのですーイ：Yang terakhir keluar（主部） / ADALAH SEEKOR BERUANG BESAR（述部）」の様に、主語と述語の逆転現象が見られることが示されており、その理由として、インドネシア語の、主語はトピックでなければならない、文の焦点ではあり得ないという制約が挙げられている。

第5章は本論文の要約であり、第1章から第4章までの結果を再度まとめた上で、総合的な考察を行っている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、日本語における3種類の「～は～が～」構文とそれに対応するインドネシア語の構文を対照言語学の方法に基づき記述した実証的研究である。

本論文の学問的貢献として、まず、①「掃除は私がした」、②「象は鼻が長い」、③「野球はあの学校が強い」という三つのタイプの「～は～が」構文にそれぞれ対応するインドネシア語の構文を引き当て、その対応関係の考察を通じて両言語の構文の特徴を指摘した点が挙げられる。

①について本論文はインドネシアの日本語学習者における日本語の受動文の多用と誤用の主な要因として、インドネシア語では目的語を主語にした「di-動詞」及び「Ø-動詞」構文が母語干渉によって日本語の「(ら)れる」による受動形に置き換えられことを挙げ、日本語の受動文をインドネシア語の上記構文に置き換えることはできるが、その逆は必ずしも成り立たないこと、さらに、インドネシア語では、助詞「は」のような対照機能を持つ文法的手段が存在せず、日本語の主題名詞句が不定名詞の場合、インドネシア語にそのまま訳すと不自然な文になるため、名詞を特定化するための手段を講じる必要があるという両言語における相違点を指摘したことも本論文の大きな貢献である。

また、②について本論文は、先行研究における典型タイプ(F)「象は鼻が長い」を含む(D)「この壺は色が青い」、(E)「この子は目がかわいい」、(G)「いわしは頭がうまい」、(H)「焼き魚はさわらがうまい」の五つのタイプの分類に基づき、すべてのタイプと部分的な共通点を示す(F)タイプその他、X-[YZ]という構造におけるN1とZが主従関係にある(D)、(E)タイプ、述部Zを言わなくても意味が理解される(G)、(H)タイプ中、「N1はN2が述部」のN1と述部が「措定的」主従関係にないタイプ(H)を除いてすべて(F)「Gajah belalai-nya panjang」、(D)「Bejana ini warna-nya biru」、(E)「Anak itu mata-nya besar」、(G)「Ikan sarden kepala-nya enak.」のようなインドネシア語との対応関係を示し、これらのタイプにおいてインドネシア語ではN1とN2の間の照応リンクとして機能する接尾辞-nyaを付加する必要があることを指摘したことも本論文の大きな貢献である。

さらに③については、「象は鼻が長い」構文を含む(D)～(G)までのタイプと意味構造の点で異なり先行研究の(H)タイプに属する「野球はあの学校が強い」(この構文を論じた第4章では「カキは広島が美味しい」)構文はインドネシア語の「Kalau tiram Hiroshima yang enak」構文に対応し、「広島が美味しい」という「AがBだ」の部分とインドネシア語の「分裂文」との対応関係に関して、焦点がAに当たる場合、日本語とインドネシア語の間には、主語と述語の逆転現象が見られることを指摘し、その理由として、インドネシア語の主語はトピックでなければならない、文の焦点ではあり得ないという制約を挙げた点も特筆に値する。

本論文は対応例の精緻な統計的分析に基づく対照言語学の分野における実証的研究としての貢献において高く評価される。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。  
また、平成29年1月16日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った  
結果、合格と認めた。

要旨公表可能日：            年            月            日以降